

山と不連続

浪川七五郎

東京の西端近くの私の住む団地からは、奥多摩の山々が良く見える。とくに冬の朝や夕方などは、山々の連なりがあまりにもはっきりと見えるので、ずい分と辺りな東京に居るのだなあと思いつながらも、山が近くに見えるということでは嬉しくなって来たりする。

私が山に興味をもち初めたのは中学生のころからで、そのころの冬の晴れた日など、奥多摩・丹沢・富士山などの山々が、頂き近くを白くして連らなっている様子が学校の校舎の階上から良く眺められ、時には

遠く南アルプスの山々が、いかにも雪が深い白さで見えた時もあった。そして、それらの山なみの美しさとともに、山の向う側はどんな風になっているのだろうか？
どんな生活をしているのだろうか？ などと考えたりしていた。

東京から中央線で松本方面へ行くと、列車は高尾をすぎたあたりからトンネルをくぐって奥多摩の山をこえ始める。そして勝沼・塩山あたりから甲府盆地に向けており始める。夜行列車に乗っていると甲府の街が眼下に輝いて見える。甲府盆地の西はすれ、萑崎をすぎると輝いて見える。甲府盆地の西の北側の高台から線路のある方向を眺めていると、こんどは夜行列車がきれいな光をはなちながら、まるでゆっくりと星空めざして昇っていく様に見える。本当にきれいだ。そんなふうに盆地をはさみながらも、山々は起伏をもって連らなっている様にも見えるが、萑崎から西の日野春のあいだの塩川をはじめだ線路の対岸には断層があり、列車の窓からも良

く見え、川をはさんで北側の奥秩父・八ッ岳と南側の南アルプスとでは、ここでとぎれているんだといわんばかりに見える。このやや赤味がかった灰かっ色の崖になっていると同じ光景をどこかで見たと思っていた。何かに似ていると。それは氷河の末端に良く似ていた。アラスカの氷河の上を軽飛行機で見ると、氷河が川になる地点でやはり、あの崖と同じ様な切れ口であった。

山の頂きから白くゆっくりと流れている様に見える氷河も、列車の窓から眺めている山々も、ときとして、とぎれる地帯を見ることが出来る。それは不連続というよりは、ひとつの流れのときれにしかすぎない。しかし、その氷河を実際に頂きに向けて登ると、不連続と表現する様なものにあたった。セラミック帯とよばれる、雪(氷)の団塊が高度差をもって滝の様になっていたり、クレバスが氷河上を何本も入り組んで、氷河を寸断したりしている光景である。

私は、山での不連続といわれるとき、この様な氷河の状態や、断層や谷、そして氷河から川・海へと水の流れ

がすぐに思いうかんだ。静かにどっしりとかまえている山と、たえず流れつづけている水。動きはまるで対照的でありながら、両者は密接で、しかも山は水によって少しづつたえまなく、変化させられている。今年の梅雨あけごろ、南アルプスの北岳にあるバットレスという岩場で、曇一枚半位もあるうかと思われるテラスが落ちてなくなっていてびっくりした。あんなにもがっしりとした岩場が崩れてしまうとは。雨水によって少しずつ侵され、突然に崩れたのである。山は静かな時の流れの中に、不連続な動きのものを含み、少しずつ変化しているといったら良いのだろうか。私が不連続、あるいはときれとして思いうかんだのも、実は連続と不可分で、自然の動きはきつと連続と不連続がひとつの流れになっている様な気がする。

*

*